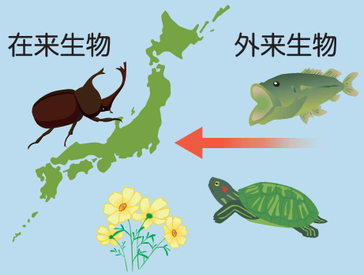
1年		4年	
2年		5年	
3年		6年	理科「生物どうしのつながり」(外来種)

8 在来生物と外来生物って何？

身の回りの生き物をよく調べてみると，メダカなどのように昔からいた生き物と，ブラックバスやセアカゴケグモなどのように，最近になって，新しく見られるようになった生き物がいることに気づきます。

昔から日本にすんでいた生き物を在来生物，外国から日本に入ってきて，すみつくようになった生き物を外来生物とよんでいます。



外来生物には，アライグマのようにペットとして飼われていたものがにげ出してすみついたもの，ボタンウキクサのように見て楽しむために育てられていたものが池などに捨てられて広がったもの，アレチウリのように外国からの荷物にまぎれこんで入ってきたもの，また，オオキンケイギクのように町の緑化のために植えられて広がったものなど，いろいろなものがあります。

在来生物

アキアカネ　日本を代表するトンボで，秋には大群が見られていましたが，最近は，すっかり減ってしまっています。

メダカ（ミナミメダカ）　流れのゆるやかな小川や用水路に昔からすんでいます。動物プランクトンやカの幼虫（ボウフラ）などを食べます。

シジュウカラ　里山の林を代表する鳥です。神社やお寺，公園などの林にすんでいます。校庭の木にもやってきます。

外来生物

アメリカザリガニ　ウシガエルのえさとして輸入され，全国に広がりました。市内では1941 年に伊丹小学校東側のみぞで初めて発見されました。水辺のどろ地などにすんでいます。

ウシガエル　1918 年から食用で国内に持ちこまれています。市内では 1970 年ごろから急に増えてきました。大きなカエルで，ブオーブオーと大きな声で鳴きます。

ヌートリア　毛皮をとるために輸入・飼育されていたものが，捨てられて野生化しました。市内では 1989 年に天神川と天王寺川の合流付近で初めて発見されました。川や池，農地などでみられます。

◎伊丹の貴重な野生生物

昔から伊丹にすんでいた生き物が，市内で田んぼや畑，池が埋め立てられ，町に変わっていくなかで，すむ場所を失い，姿を消したり，数を減らしたりしています。その中でも，ホタルやオニバスなど，数がとても少なくなって，伊丹から姿を消しそうな動物や植物について，市では「伊丹の貴重な野生生物」に指定して，すみかとなる環境を整えたり，市民団体などといっしょに保護して数を増やす活動をしています。

シルビアシジミ　はねを広げても 2cm 足らずの小さなチョウです。昔は田んぼや畑のまわりでよく見られていました。現在は，大阪国際空港の草地をはじめ，猪名川や伊丹スカイパークでみつかります。

デンジソウ　水の中から生えるシダ植物です。昔は田んぼにたくさん生えていました。市内では絶滅したと思われていましたが，1992年に瑞ケ丘の田んぼで見つかり，学校ビオトープなどで守り育てられています。

冬ごしをするカモ類の群れ　毎年，秋から春先まで，マガモやオナガガモなど 10 種類ほどのカモ類が市内の池や川で冬を過ごしています。昆陽池公園は，鳥獣保護区特別保護地区に指定されています。

◎侵略的生物

増えすぎてしまい，昔からいた生き物や人間のくらしに悪い影響をあたえている生き物を「侵略的生物」といいます。その多くはアカミミガメやアレチウリなどの外来生物ですが，ハシブトガラスやクズなどの在来生物もいます。侵略的生物が増え続けるとますます被害が大きくなるため，数を減らしていく必要があります。

アカミミガメ　ミドリガメの名前で，ペットとして輸入されました。飼育に困った人たちが川や池に放したため，市内でばく発的に増えています。にがしたり捨てたりしないで！

ハシブトガラス　昔から身近にいたカラスです。生ごみをえさにして急に増えたため，わたしたちのくらしや農作物に被害をあたえています。生ごみを減らす必要があります。

ナガエツルノゲイトウ　1986年に，日本で初めて伊丹市で発見されました。毎年，昆陽池などの水辺で大発生しており，ほかの水草が育ちにくくなっています。

▲復活したオニバス
◀カメ調査

◆アカミミガメの防除対策とオニバスの復活

黒池・西池のオニバスが，2002 年から見られなくなりました。兵庫県立伊丹北高等学校自然科学部では，水生植物を食べるアカミミガメが増えたことがその一因と考え，2011 年からカメの調査を行い，そのときに捕まえたアカミミガメを，市が防除対策として引き取ってきました。その対策のおかげか，2017 年夏には 15 年ぶりにオニバスが育ちました。

答え：約11mm。日本で一番大きいヒメボタルかもしれません

クイズ：デンジソウの名前の由来は何でしょう？（答えは次のページ）